

④1622

東洋史 164

558

2257

1.318

世界の歴史 24 緑

六朝 2311

239年

220

19年

1141

1215

19年

九品中正の制度

東洋史 164

1228

魏の文帝(曹丕)が漢を奪った時(二二〇)か

ら、はやくも十九年の歳月が流れていて

魏国内に漢代とは一味違う独

特の文化が生まれあつた。

この文化は、つづく西晋南北朝にわたって

の、奢侈風流に満ちた、はなやかな六朝文化

へと展開するその源泉となつたほどのもので

ある

洛陽の都では今、豪族名門の門閥貴族達が

中央の官僚として大きな勢力を独占しはじめて

いた。漢を奪った年(二二〇年)に

先に魏の文帝が定めた官吏登用に關する

九品中正の制度は、漢の帝位の

禅譲を受けたかたちで国をたてた魏が、

①まず、漢の官僚を新政府の下に秩序づけて

吸収する為

②さらにまた、新たな官吏を全国的に登用し

ていく為
設けた画期的な制度であつた。

官吏志望者の学力・才能・徳望な

どの程度により、九品中正の等級をつけ、中

央での任用における公正をはかつた。

九品中正の制度は

この当時、豪族をいよいよ権勢

に公平さは失なわれて、

の座へ押し上げていく道具となつていた。

つまり、九品の制度による任命は、有力者

の子弟に厚く、無力者の子弟に薄くなる弊害

をもたらしはじめていた。

こうして洛陽の都では、豪族やその子弟達

ばかりが優雅で豪華な暮らしの限りをつくす

ようになりつつあり、

の爛熟のきざしは、はつきりと窺えるまで

になつていった。

の歴史(4)唐とインド、中央公論社、二四頁

「東洋史辞典」創元新社へ九品官人法、

「辞苑」へ九品中正法、等参照

*

三〇文(孝)1-119^P

ルビ 1321^P6^P

ルビ 住居

三〇文(孝)1-74^P

南緯経820^P系

ルビ 第3代

1.320^P

昭陽が北

大極が南

1304^P6/6 1行

1310^P-1/2

1309^P1/2 末8行昭陽殿

1155^P平昌門

南宮と北宮

洛陽宮城の南正門「平昌門」の奥、真正面

に見える南宮は、築地で囲まれている。

ぐるりと取り巻いて、その築地は、

なにか特別な素材でも混ぜてあるのか、

豊かで貴い色をしていた。

そして、築地の向う奥には、瑠璃の瓦を重

ねた太極殿や昭陽殿等の美しい屋根が見え隠

れ、太極殿・昭陽殿は、魏の南宮・崇徳

殿あた場所に、魏の明帝によつて建立され

ただという。(「三国志」(上)世界古典文

学全集、筑摩書房、七四頁「○○一頁参照」)

何とも、えもいわれぬ美しさに、難升米等は

いよいよ声もなく感入った。

それは、魏帝第三代の帝王、武帝「曹芳」

が居たところ、王宮だった。

南宮の北方に位置する北宮には、建始殿・

式乾殿・芙蓉殿・九龍殿・崇華殿などの華

やかな宮殿があるという。

別名

三〇文(孝)1-402^Pルビ

コクヨ ケー20 20X20

三〇文(孝)1-114 1/4 1/4 1/4 1/4

1232 芳即

1210^P

曹芳8才

616

681^P

1303^P3/4 後漢代の因

1310^P-1/2 9才

100 3桁
1,000 4桁

こと

三〇五(Ⅰ)-399

3
9
27
81
+120

小林 291P
女官

三〇五(Ⅰ)-402

1321P

①323

侍す
数人

元971P

貴人の側に奉仕す

「という」①320-1/212P
前頁8桁

こと

後宮の女達
宮城の内には、人々の伺い知れぬの出来
ない、尊厳に満ちた神秘の聖地、禁裏がある
という。
すなわち、宮城十二間で囲まれた宮城内奥深くに
のちらなる内奥に、天子が日常の住居と
しておられる内裏があるというのである。
なま、この最奥の宮禁には、天子に仕える
百人あるいは千人以上も侍っていたようだが、
参考までに記すと、
日礼記に「昏義に天子は六つの宮殿を立て、三夫人・九嬪
・二十七世婦・八十一御妻、あわせて六宮(後
宮)の女官百二十人をもうける」と
記述がある。だが、秦や漢の時代になると、三桁・四桁
の数字ものぼることとなり、前漢の頃、
長安の都の後宮には美人が千人近く居たという。
そして後漢の末、建安二年(一九七)に皇

小林 374P

①319-3/16P
①324-3/3P

小井 99⁷

(かつてに自稱)

三国志 卷九上
末ヲ行
ルベシ

帝を僭称した袁術の後宮にも、数百人の女たち
がいた。へ「三国志」世界古典文学全集

(24A) 筑摩書房、(I) 三九九、四〇二、二〇〇頁参

曹魏の明帝は、宮殿の大造営を行い、多数の

女子を広範囲にえらびとり、美女を徴発して
後宮をみたしたので、宮女がむやみに多かつ

た。しかし、後宮の宮女の数には禁令が厳重
だったから「公表されるところはなかった。

(「三国志」筑摩書房、(四) 一七〇、一七二頁

等参照)

493

■呉の国の後宮の宮女は、五千余人であつた
とも、万に^{のぼ}ける数であつたともいわれる。(「三

国志」筑摩書房、(四) 九五、三二二頁参照)

■一方、魏志倭人伝に

「(卑彌呼は)婢千人を以って自ら侍せし

むし

と記されている。

司馬炎

■尚^な後代のことながら、晋の武帝は、

呉を平定したからのちは政治に対する情熱を

あ1321 9~10月
数人(あといは
4人)4人

⑤ 1321 9月
1231 2月
(おと)

1,323

P 漢詩
219

小林 1011
東洋史 482

隋書 69

え184

9%
15%
9%

*

えていたのだらう
と想像される

詳細は分らない

またハ歳の幼い少年であつたとはいえ、
ヘその後宮に、女孺が少くとも数百人は仕

初三年(二三九) 当時、魏国の天子曹芳は

このような文献等からみて、曹魏の景

と歌っている。

後宮の佳麗三千人

叙事詩 日長恨歌 唐の白屋易(白楽天)は、唐の
玄宗皇帝と楊貴妃との恋愛に取材して作った

と記述している。

「倭国の」後宮に女六・七百人有り

また、隋書倭国伝には、

「世界の歴史」(4)六朝隋唐、集英社、ハ三

乗って彼女たちの部屋へでかけたという。

後宮に女一万人を擁し、毎晩ロバに

え2271

大カマ 2282 大カマ 706
金カマ 市イ
①1168 1/2 右端参照 (金市) ←

田平 新火新 351P
(265~316) 310F
同文 ①1169 1/2 1.324P-2/2

ひう小林 憑 4061

ううこ 漏鼓 2352P
カマ 335

カマ 658 屋ヤウ

①1169 1/2 10行へ

✳

タトル ①1141

①1142 11行

場)の項(金市)参照
七と二ハ第十四章(曹魏の洛陽城)の項(陵雲台)で同市
文学大系、平凡社、三一〇頁、三二二頁注二
という。〔洛陽伽藍記・水経注〕中国古典
とあり、金市は北のかた洛陽聖に對する□とあ
る。〔西晋末の永嘉の乱(三〇七)三二二〕
の時に、結んで聖としたものであり、洛陽聖
と号する。故に〔洛陽記〕に、〔凌雲台の西に金市が
あり、金市は北のかた洛陽聖に對する□とあ
る。〕
〔金墉〕城上の西面には觀(ものみだい)
を列ね、五十歩ごとに一つの睥睨屋(城の上
から敵のようすをひそかにうかがう所)が設
けられてゐる。
台〔金墉城〕上には、一つの鐘をおいて、
もって漏鼓(時刻を知らせる太鼓)に和せし
める。
穀水は、洛陽小城の北をすぎる。〔小城は阿旧城によつて金墉に憑結(も)〕
たれるとされてゐる。もとの向城である。
〔西晋末の永嘉の乱(三〇七)三二二〕
の時に、結んで聖としたものであり、洛陽聖
と号する。故に〔洛陽記〕に、〔凌雲台の西に金市が
あり、金市は北のかた洛陽聖に對する□とあ
る。〕
〔金墉〕城上の西面には觀(ものみだい)
を列ね、五十歩ごとに一つの睥睨屋(城の上
から敵のようすをひそかにうかがう所)が設
けられてゐる。
台〔金墉城〕上には、一つの鐘をおいて、
もって漏鼓(時刻を知らせる太鼓)に和せし
める。
穀水は、洛陽小城の北をすぎる。〔小城は阿旧城によつて金墉に憑結(も)〕
たれるとされてゐる。もとの向城である。
〔西晋末の永嘉の乱(三〇七)三二二〕
の時に、結んで聖としたものであり、洛陽聖
と号する。故に〔洛陽記〕に、〔凌雲台の西に金市が
あり、金市は北のかた洛陽聖に對する□とあ
る。〕

コクヨ ケー20 20X20
①1168 1/2

洛陽から記27 観とある。
①1142 11行 観台 621

次頁2~3行 ①1319 3/3 16行 ①1321 2行

1.325^P-2/2

高官達について ④ 1328^P

「小町」57^P

同文 ④ 1180^P 1332^P

のであろう。

*

義里と名づけた。
遷都（四九四）の始め、ここに住む宮仕え
の者たちは、互いに譏りあい、とうとうみな
立ち去ってしまった。云々
とある。（第十四章へ殷の頑民の項において既述）
この記述から
北魏時代には、洛陽宮城外に宮仕えの
者たちの住居があった。
という状況が分る。
曹魏時代においても、同様だった
恐らく

太いゴキ

ろく: 元2352'
 赤1324'
 井元元609'

コクヨ ケー-20 20×20

漢魏六朝詩集 300上
 漢魏六朝詩集 300上
 漢魏六朝詩集 300上

鮑照はまた

において次のように詠んだ

詠史 (今の世の中は) (「漢・魏・六

朝詩集」中国古典文学大系16、平凡社、二九

九と三〇頁参照

十二もある都大路には

見上げるようなお屋敷がびっしりならぶ

役人たちは冠の美しい紐をひらひらさせ

遊覧客は手綱も軽く馬を走らせる

夜明け前 残りの星がまたたいてゐるのに

覆いのついた車が雲の湧くように集まってくる

お供揃いのなんとにぎやかなこと

鞍おく馬はピカピカと土にまで照りはえる

すなわち、宮城内に居住する高官といえども

夜明け前、残りの星があるうちから、お供揃

いものにぎやかに覆いのついた車を馳せて

行き、そして、見上げるような屋敷がび

っしり並らぶ宮城内の十二の都大路(十二門

にっらなる大路の意味か)を、冠の美しい紐

をひらひらさせ、白い帯をひるがえし、手綱

さはきもあざやかに、雲の湧くように、口南

宮内や北宮の門をめざした、というので

1,329
④4363-2/2

④1324 金堀城に鐘を置いて
-3/2 漏鼓に80秒を

改訂

つてきたのかも知れない。

米

一、方、

平城(宮)

時代と場所は大きく異なるか、

十二門は、日の出と同時に鳴り渡る太鼓の音

とともに開いて、そこへ約一万人の役人

達が、そろそろと入っていった。

また、日没とともに太鼓が鳴って、宮城門は

閉られた。

(「よみかえる平城京」坪

井清足、日本放送出版協会、八九一九頁参

照)

の宮城門が開かれた、というのである。

ただ、太鼓だけでなく、鐘も打ち鳴らされてい

たのかどうかについては分からない。

米

洛陽から95° 38' 50" 官吏 508° 1325° - 1/2 行へては入る。
 洛陽から95° 38' 50" 官吏 508° 1325° - 1/2 行へては入る。
 洛陽から95° 38' 50" 官吏 508° 1325° - 1/2 行へては入る。

城北地区

もとの成周城内

宮城のまわりを周り成す「洛陽の街」は
 士庶（官吏と庶民）が居住する住宅区となつ

難升米と都市牛利とは、楊柳の並木道を穀

水の流小に沿って歩いていった。

穀水は、宮城の北面をみたす真直東流してゐる。

金墉城のすぐ東には「大夏門」があつた。

この大夏門の東北方「中朝の頃（晋）

が洛陽を都とした時期、練兵場たつたという。

四角に「曹魏」の「練兵場」が置かれていたのであろう。

四方に「練兵場」の内を覗く知

近衛兵らが角觝戯（角力）をたたり、宿衛の兵士

が刀をふりまわしたり、また農閑期

となつて集まつた兵「庫」も、戦の訓練に

余念がないという。千乗万騎が集まつてゐる

の「大勢」の時折、大勢の男達の勇ましい掛け

声が、耳を聳（た）げるばかりに沸き起つた。（「洛

陽伽藍記第五（城北）参照

いん 云
漢民 151P

洛陽が 95'

1.33)

二と
洛陽が 6' 9530

二と
眺む 1708P
ヤマト 80(東)
1103P, 1331P, 2332P
二と
1315P 中口の席部 (三層楼も10丈たつたあ？) 78P
二と
1155P

平凡社、六頁注三〇参照

*

たのだらうと。 (一洛陽伽藍記・水経注)

といわれている

宮城北面には、大夏門と、
大夏門は、もと他の宮城門同様十丈
の二層楼だった。が、
三層楼に造り替えられた。という。(第十八
章へ端門の項において既述)
大夏門の口、広莫門とは、北から吹きつ
ける大風のことである。広莫門の北方
には、芒山の山の峯が連なっており、
越えて北風が吹きおろすので、この名が付け
られている。

扶余系殷民や

商は殷

①1180^P 1の新聞記事
69^へ

①1180^P 1325^P 治陽がランに95^P
②1180^P 427^P OK 1,332^P - 1/3

天啓
改訂

改訂 改訂

221^P

上商里

難升米等は、広莫門の東北方に位置する上

商里」という所へやつてきた。遙かな

箕子庫と同族である殷民の末裔達が、かたく

ななまでに殷の習俗を守り通してゐるという

噂を聞き、是非にも訪ねてみたいと思つた

のだつた。

北魏滅亡後、遺臣の楊衒之によつて書きと

められた日洛陽伽藍記の巻第五(城北)に

部分にこう記されてゐる。

「洛陽城の東北に上商里があつた。殷の頑

民が住んでゐた所である。高祖(北魏の孝文帝)は

開義里と名づけた。

遷都の始め、此処に住む宮仕えの者たちは

互いに譏りあひ、とうとうみんな立ち去つて

しまった。ただ焼物作りの職人だけがこの地に

残り、都の焼物はみなここで作られた。そこ

で世間の人は、洛城東北の上商里、むかし

殷の頑民が住んだ土地。今は職人が食子造る

人みな立ち去り、住民取らるゝと歌つたもの

か、冠軍將軍の郭文遠だけは、ここに

124

114^P

① 1182°
元 839°

元 1939°
余儀 2275°
津 114°

1.332 - 2/3
②

連続
般民 元 151°

元 1180°
元 49°
③ 1180°
元 1325°
元 1993°

別館を作った。その邸の作りと庭園は王侯に
も匹敵するものだった。云々
とある。(第十四章へ般の頑民の項において既述)
先述のとおり、
(1) 周公旦は、成周城(最外外郭城)を築いて
ここに般民達を強制的に住まわせた。
(2) 不条理にも広大な圃いの内での生活を余儀なくさ
たといえ、般の人々の中でも城北地区の
(3) 上商里の地に連綿として住み続けた排他的で
ある般民の子孫達は、周およびその以
上商里に居住した者達の結束は強かった。
降の異教徒た
ちの風習に染まることを潔いとせず、伝統的
な般の信仰を頑に守り続けた。
(4) そこで、上商里の般民の子孫達は、世間の
人々から特別視され、日般の頑民と呼ばれ
た、歴史的な背景があったのだ
というところなのである。と推察される。
なお、ここが般の頑民の故地だとい
うので、
「上商里に住んでいる者は、般の頑民の子
孫に違いない」

元 2219°

元 265°

P
1,332 - 3/3
1,332-3/3 1571

1332-1/3
1332-1/3 1571

と考えられ、この地に住んでみるとい
うだけのことで、奇異の目で見られ、
孝文帝が四九三年（もしくは四九四年）に山西省の大同
でなにかうか。
さて、北魏から洛陽へ遷都した始めの頃
そんな過去の経緯など知らない多くの宮仕
えの者達が上商里の地に移り住んだよ
うである。
しかしやがて、ここに住む役人達は、互い
に相手を、
殷の頑民の子孫だろう
と疑いあい、譏りあって、とうとうみんな立
ち去ってしまった、と解される。
その小にいても、
洛城東北の上商里、むかし殷の頑民が住
んだ土地。今は職人が食子造る。人みな立ち
去り、住民恥じるし
と歌わせたというが、
へ一体なぜ、住民が恥じたのであろうか
と、不審に思われる。
周公旦に端をなすこの洛陽の都の一隅にあ

1,333^P-1/2

いさ 経緯 前5所
な 話 1657 他所 2283

いさ 経緯 前5所

な の か も 知 れ な い

い や 次 の よ う に 解 釈 す べ き

造 り 続 け た 、 と い う 事 情 で も あ っ た

か へ 行 く 上 商 里 の 地 で 貧 子 を

と 話 ら れ 、 取 ず か ー い 思 い を ー な か ら も 、 ほ

か へ 行 く あ て が な く 止 む を 得 ず

子 の 職 人 達 の 頑 民 の 子 孫 だ ろ う し

か ー 所 か ら 上 商 里 へ 移 っ て き た 貧 子

に な っ て し ま っ て い た の だ ー ー ー 歴 史 の 流 水

に な っ て し ま っ て い た の だ ー ー ー 歴 史 の 流 水

に な っ て し ま っ て い た の だ ー ー ー 歴 史 の 流 水

に な っ て し ま っ て い た の だ ー ー ー 歴 史 の 流 水

に な っ て し ま っ て い た の だ ー ー ー 歴 史 の 流 水

に な っ て し ま っ て い た の だ ー ー ー 歴 史 の 流 水

に な っ て し ま っ て い た の だ ー ー ー 歴 史 の 流 水

に な っ て し ま っ て い た の だ ー ー ー 歴 史 の 流 水

に な っ て し ま っ て い た の だ ー ー ー 歴 史 の 流 水

430(2018)12.26(47~12.27(3回)
令和元(2019)5.26(17)~5.27(3回)
前14行「唐」の「か」も知れない

下5/27
5/26

1,333^P-²/₂

お前。
作り。

高祖=孝文帝宏
中興元年 825^P
①332²-1/3

商=殷 州外^P
213

土する「癸」との間に「製法や様式等の点で類似しているところがあるのかどうか」今後の調査を待ちたい。

日本列島に渡来して「癸」を営んでいた
扶余系殷民の子孫達や箕子達と同様
的技術を持つている殷民の子孫達は「上商」
里(商は「殷」と同義。殷民の里といった意
味か)に住んで、箕子を造り大いに誇りとした
それなのに「北魏の高祖(孝文帝宏
の時、何と「聞義里」という地名に改められ
てしまった。
殷の民の子孫である箕子造り職人達は、そ
れを「恥」かしくいこと此の上もない」と感
じた。
そこで、世間の人は、
「名城東北の上商里。あから殷の頑民
が住んできた土地。今も職人が箕子を造って
いるが、住民は「恥」に思っている」と歌
ったのかも知れない。
しかし、詳しいことは分らない。
といった次第なのではあるまいか。
木(かし、詳細は分からない。
なお「上商里」で出土する箕子と「日本列島」で出

二つとある せきしん 云
洛陽から26注 石橋 1241
313P 広い路
(二つ) 云 1241P

また小る云 2189P 「直線状」 2218P
寄りかかす
1.334P - 1/2

大電 時刻

大電 花やい 大電 時刻
栄花 花やい 大電 時刻

また云 数多 58P
1335P 49P

1330P
1335P 49P
城北地区

城東地区

悠久の歴史を秘めた洛陽。

気も遠くなるほど、
の遷遷を経て今日に至った華麗な都、
名都

洛陽城
洛陽の都の空に、
は昇り輝いて、
に照らしていた。
永い時の推移の瞬間を鮮やかに

洛陽の街は整然と区画され、
家々の軒は
直線状に並び、
ゆったりと流れゆく穀水は宮城門や城壁、
らに往き来する人々や車馬などを空しく取り、
感

動さひととき鮮烈なものであった。
石橋（石造りの欄干）に
なかめていた。
奇り懸り

その石橋のつくりは、
路が広く、
橋のたもとに二つ
巧

④1057^p-1/2の④ ⑤1156^p

1.334^p-2

秋 1344^p
墨本 9A 今の10月頃
④1157^p-1/3
⑤1154^p

1238^p

④1157^p 1/3
89

の石柱が建ててあり、橋の右側の柱^{はし}には
「陽嘉四年（一三五）に石橋の梁柱を作ら
せたと銘が刻まれている」とある。
（「洛陽伽藍記・水経注」）

中国古典文学大系、平凡社、四六頁注一。三
一三頁参照。第十四章へ「宮城門名」「宮城
の形態」の変遷の項において既述）
「秋」すでに「秋」深まり、石柱の上に
な赤トンボが「羽根を広げてたた」と止つ
ていた。

石柱の上に

636

なお、「九六城」と称される南北に長い長
方形の洛陽宮城は、曹魏の次の
西晋時代に、宮城東面北側の四分の一ほどを
除いて、南側の四分の三ほどの全てが、約一
里ばかり東方へ突出するように、造り変えら
れることになる。

「今」曹魏の景初三年（二三九）末頃
洛陽宮城の東面は一直線状となり、建春門外
一里ほどのところを「穀水」が南流していた

（巻頭の第9図参照）

（変遷の歴史）の項において掲載の第④図参照）

④

「1157」54頁や9図「曹魏洛陽宮」

コグヨ ケ 30 20×20
新ヤロ-90

④陽渠か？ ④1338^p 154

①1353P
同又①157-3/3

洛陽ガランに36P
①1338Pに同又

洛陽ガランに313P
①1334Pに2P
1,335P

外ガランに34P

郭門

宮城東面北端の門、建春門外の広い幅の

石橋から遙か東方を望むと、真直ぐ

続く御道のかなたに、最外外郭城東面の門で

ある。日郭門が、陽の光に映えて輝いてい

た。(以下、巻頭の第8511図参照)

人々は、その門を日三門と呼んでいた。

郭門が三道に開いているので、日三門と

呼ぶのだし。

とリウ。第十四章「宮城門名」「宮城の形態の変遷」の項参照

日洛陽伽藍記の巻第二へ城東に、こう記

されている。

「建春門の外に出て、広幅の石橋を渡り

一里あまり行くと、東石橋につく。

橋は南北に通っており、晋の太康元年(二

ハ〇)に造られたものである。

嵇康を(二六二年に)処刑した場所である。

洛陽ガランに36下

大カランに2281P

洛陽から226P
中央から226P
くまの
公卿 元617P
三道 ① 1,281

ここ

1,336P-1/5

洛陽から226P
38P
11人元970P
土人 元617P
教育は地をある人
洛陽から226P
38P
此所 元784P

かあった。大道の東には綏民里があり、
綏民里の東が崇義里で、崇義里の東に
七里橋があり、石で作ってあった。
七里橋の東一里に、郭門が三道に向か
って開いており、人々はそれを郭門と呼
んでいた。
人と別れる者はたいてい郭門の外に相送
らん、と言った。都の士人が、人の旅立ちを
送り、また帰京を迎えるのは、常にここにお
いてであった。
とある。
この郭門（三門）について、次のよう
に想像される。
●東方の平野部と洛陽最外郭城東面の
郭門とを結ぶ大道は、単なる一本の
道だった。
●ところが、最外郭城東面の郭門から
宮城東面北端の建春門へ到るまでの大道
は、三つに分けられ、中央が御
道で、公卿高官の為の専用道路で、その
の両側の通路が一般庶人用であったと解さ

① 1310-1/2
② 1320-1/2
崇義里
崇義里

洛陽から226P
38P
此所

れる。

●それは、最外外郭城南端の正門。日端門と宮城南面の正門。日平昌門を結ぶ大道の構成と、ほぼ同様のものであったろうと思われる。

第十八章へ宮城の項参照

●また、最外外郭城東面の日郭門は、三つの門からなり、京域内の三道に向かつて開いていたので、人々は、水を日三門と呼んだのであろう、と推察される。

*まさか、日郭門の外側に三道があったというわけではあるまい。

この日郭門は、場合も、へ中央が天子・公卿・高官の専用通路とされて、一般人は、日郭門西脇の門(最外外郭城掖門)の左側を通って入り、出る時は右側を通る。

という定めであつたろうと類推される。(第十八章へ宮城の項、冒頭参照)

つまり、へ日建春門を出て、日郭門へ到る大道は、三つに仕切られていて、中央が日御道、そ

の両端の通路が一般人用とされ、
 つの道に打ち開く。郭門は、三つの門から
 なり、この門が京城の東端をなしていた。✓
 よう理解される。

そこ、三門の外に相送らんと言いつた。たいていこの
 郭門において見送り、また、帰京を、互いの無
 る際も、常にこの郭門において再会し、互いの無
 事を喜び合った。たいてい、郭門において再会し、互いの無
 すなわち、洛陽宮城東方のこの郭門と

いうのは、
 △(最外)外郭城の門△
 という意味なのであろう。

また、日建春門の東のこの郭門は、
 北魏時代から、晋の曹魏時代にも、すでに存
 在していたのであろう、と考えてみたい。

*

漢・魏・六朝詩 65P
金箱 琴(1) 11枚 646

かひ 大 445' 漢の武帝に488
桑前 大 1199P
漢魏六朝和 88 1.336-4/5

三

栗田

平田口

之 79' 地 84' 84'

・百利 27-384' 平安京の回
・京都地回

洛陽からここ 38'
⑤ 1315P-1/5 版

427
フル

最外郭城の東・西の門は共に二層の樓門で、

三本の階段通路を備えていた。

扶門(アーチのこと。三アーチの四つの基部の内、外計ハケ

所)には、四力士と四獅子があり、金銀で

飾った上に珠玉がちりばめられていた。

のではなからうかや

* なお、

へ洛陽最外郭城の東の郭門は、

平安京の栗田口(京都市東山区の地名で、三

条白川橋の東に当り、大津への出口)に相当

東海道の京都への出入口

する

といえよう。

*

因みに、

和歌・琴調曲には、東門行という題

の詩が掲載されている。

貧乏なため、家をあとにして、

ねばならない男と、その妻の悲哀をうたった

1845

2356

三〇七(第)74
三〇七(第)74
三〇七(第)74

1336-5/5

城下町

改行 改行

2541

16分

ものである。
●庶人が住む京城の東の門である郭門(三門)漢の時代には東門と呼びならわしたのではな
かううかや
●ローマと同じく楽府詩集卷三十七には、西
門行しという詩も載っている。西門という
のは城下町の西の木戸のことである。という
●あるいは、この詩の「西門」は、最外郭城
の西面に開く郭門であつたかも知れない。
〔漢・魏・六朝詩集〕中国古典文学大系16
西の郭門の外〔西の郊外〕には月を祭る祭壇が築かれ
平凡社、六四七六五頁参照
●また、東の郭門の外〔東の郊外〕には太
陽を祭る祭壇が築かれていたろうか。
●三国志魏書・文帝紀、黄初二年(二二
一)春正月四日祭に、
●東の郊外で太陽を祭った。――(中略)――
臣裴松之が考えるに、これでは天子が春分の
日に太陽を祭り、秋分の日には月を祭ることに
なつてゐる。云々
とあり、同書、明帝紀、太和元年(二二七)

1,337^P

⑤ 1344^P 夏曆、段屠、同曆
⑥ 1350^P
⑦ 1357^P ~ 28

条に、

・ 二月二十一日、

・ 秋八月、

とある。

八九頁参照)

秋八月、

西郊で月を祭った

とある。

八九頁参照)

東郊で太陽を祭った

とある。

とある。

八九頁参照)

太

陽

を

祭

った

と

ある。

八九頁参照)

と

ある。

と

ある。

*

洛陽ガラン記 46P 6

洛陽ガラン記 34P 下
46P 6

1338P 二
二
三

1335P
同又

古代中国の都市 - 図 227P
洛陽ガラン記 36P
1171P 2/2
1173P

とある。

とが記されている。

洛陽伽藍記。

城東には、
〔北魏時代の〕建春門の外に出て、一里
あまりゆくと、東石橋につく。橋は南北に通
じており、晋の太康元年（二八〇）に造ら
れたものである。橋の南は魏の時の馬市があつ
た所で、嵇康を処刑した場所である。
と記されている。城東地区に郭門の南に
つまり、曹魏時代の馬市は、建春
門を出て一里余りの所にあつたようである。
また、同書、卷第二に城東の冒頭に
「建春門の外に陽渠の北には、土で築いた
高さ三丈（約七メートル）の台があつた。その上
には二階建の建物があつて、太鼓が掛けられ、市
を監督するため物見やぐらとなつていた。
系の役人がこの旗亭（市楼）に詰めていて
市場の終りの時刻になると、太鼓を鳴らした」
とある。

正

三口史 283, 290 1,339^p

せいふ 1236^p
政府 まつりことと所
紙幣

ということ 新養来行

水経注^レ 平凡社、三四頁、四六頁注六参照)

すなわち、

へ馬市^{うまいち}は、宮城^{みやぎ}の外^{そと}にあつたにもかかわら

ず、^{とき}時の政府^{せいふ}管轄^{かんかつ}下に置^おかれていた、

ことが知^しられる。の直接^{ちやくせう}の

おろしく、^ト述^のべたように、

馬市^{うまいち}は、宮城^{みやぎ}外^{がい}にあつたとはいえ、最外

外郭^{がいかく}城^{じやう}によつて厳重^{げんじゆう}に守^{まも}られ、保護^{ほご}されてい

たので、人々^{たうたう}は安心^{あんしん}して商^{あきな}ひが出来たの

であらう。

そして馬市^{うまいち}は、北魏^{ほくゑ}時代^{じだい}においても活用^{かつよう}されていた。

と思^{おも}われる。

また、^そ三国志^{さんごくし}へ曹真伝^{そうしんでん}等^{らう}によつて、東^{ひがし}の

市場^{いちば}に処刑^{しよけい}場^{ばう}があつた、^ということが分^わかる。人の集^{あつ}ま

る所^{ところ}で、見^みせしめとしての処刑^{しよけい}が行^{おこ}なれた

のであらうか。(「三国志^{さんごくし}」(I)世界^{せかい}古典^{こくげん}文学^{ぶんがく}全

集^{しゆ}、筑摩^{ちくま}書房^{しやうぼう}、二八三頁、二九〇頁。他参照

米